

益、文章が窮屈になる也。其人と對談するが如き思ひありてこそ、はじめて書翰の價値はあるなれ。吾人は、口語録の成るべく早く書簡の範圍に進入せむとを希望す。

●著作界の傾向

山崎、佐藤二學士の大日本地誌出づるやうになりて、我國の著作界も、大に進歩したる哉。簡便に、紹介的に一寸したる知識を附與するを主とし、定價も二三十錢に過ぎざる書物の歡迎せられしは、既にひと昔となりぬ。讀者の眼も進み、購買力も増し、高價の書物も、世に行はるゝやうになりしが、先づ起りしは、手を要して、頭を要せざる書物也。即ち古書の翻刻、諸種の編纂物也。編纂物とは、人名辭書、社會字彙、國書解題、古事類苑の如き、これ也。されど、讀者も、作者も、頭を要する書物を望むやうになり、追ひ／＼有益なる書物、世にあらはれたるが、大日本地誌の如きは、其最も大なるものにて、頭を要するとも多く、費用を要するとも多し。かゝる事業が、民間にて企てらるゝに至りたるは、大に著作界の爲めに賀せざるべからず。

志賀矧川の日本風景論は、一寸器用に、面白く出來居れど、地質、地理、地文、風景の梗概に過ぎず。地理の書あれど、教科用に過ぎず。名勝案内の類は、野崎左文の日本名勝地誌の如き、ほゞ其要を得たるあれども、地質上、地形上、人文上、産業上、交通上、すべての點より完全を期せる知識を以て作り出されたる地誌は、この大日本地誌に於て、始めて之

を見る也。

われ旅行を好み、從つて地誌の類を讀むことを好む。この書の一巻關東の部は、ほゞ讀了せり。多人數の補助に成れることとして、全籍に於て統一せざる所あり、矛盾せる所あり、誤謬もあれども、これ小缺點也。小缺點を以て、大なる功勞を没すべくもあらず。これ豈に余が好む所に偏頗なるものならんや。

●内容と外形

内容、外形、相待つて完美ならずんば、文藝として完全なるものならざること、今更言を待たず。明治の文藝に就いて、之を言はむは、短歌は、内容や、進んで、外形は、なほ不完全さはまれり。舊格調を破らむとして、新格調未だ完備せざる也。之に反して、漢詩は、外形、前代未曾有の美觀を呈して、内容に、何等の見るべき節なし。いづれかと云へば、吾人は、短歌の前途に囑望する也。

論文に、小説に、美文に、新體詩に、おもに内容を問うて、外形を顧みざる傾向あるは、吾人の憚らず思ふ所也。文章の美といふとは、文藝以外の製作にも缺くべからざること也。歴史も、地誌も、傳記も、哲學も、科學も、千古に傳はれるものは、概して、内容と共に、文章のすぐれたるもの也。況んや、文藝上の製作をや。

今の世、思想の卓越したるものなければ、文章の卓越したるものもなし。西洋の思想のうけうりすれば、一時文壇の看

物たるに足りて、お茶を濁すに足れども、永遠には難有かられざるべし。況んや文章の拙なるものをや。

●雜評錄

●例として、新年の諸雜誌は、競うて名家の傑作をかゝるが常なるが、新春匆匆、屠蘇の醉、未だ醒めざるに、俄に祖母の愛に丁りて、未だその半も讀了するに及ばず。次號を期して妄評を試みむとす。寄贈を辱うせる書物も亦。

●たゞ單行本の中には、幽芳の乳姉妹は一讀せり。義理の爲めに、戀愛を擲つ高潮に達して、前篇終れり。後篇が渴望して待たるゝ也。たゞ一言すれば、今の世、學殖見識ある小説家は脚色に拙なく、脚色の一才器用に出來るものは、學殖見識なく、事實を見て、人物を見ず、偏に婦女子の愛顧を博せむとのみつとむ。幽芳は、今の小説家の中には、學力あるものにて、脚色も巧みなり、而かも壯士芝居的ならず、上品にして、趣味ありて、新聞小説として、上乘なるものといふべし。

●我觀婦人、虚心窟のあらはせる所也。思ふに、著者は、まだ妻も持たぬ青年なるべし。婦人を觀察せむと、容易に非ず。少くとも、五六年は妻と共棲せざるべからず。少なくとも花柳界に千金を投ぜざるべからず。

●樗牛死して、樗牛會起り、紅葉死して、紅葉祭起り、落合先生死して、木枯會起りぬ。直接に、間接に、先生の感化をうけしもの多けれども、最も親しくその門に出入せしは、

月杖の文、鐵幹、躬治、清春の歌、之を菽の舍門下の四天王といふべき乎。鐵幹は、最も古き門人にして、最も短歌に長ず。豪壯纖纒兼備ふ。所謂藍より出て、藍よりも青きもの乎。短歌の外、新體詩にも長じ、之をよくし、小説をもものす。最も多方面也。躬治、力ありて才足らず。清春、すなほにして、可憐也。たゞ少し才が足らぬだけにて、其他の點にては、最もよく先生の傳を傳ふべし。この外、薰園、柴舟、月桂など、新派歌人中の驍將也。これらの人、一致して、木枯會を起して、先生を追慕す。恩を忘れざるものといふべし。されど、涙をこぼして、先生を慕ふのみにてはこれ未だ先生に酬ひたるものと云ふべからず。詩趣を解する人を養成して、國歌國文を發達せしめむとは、これ先生が一生の理想にして、且つ盡力せし所也。門下生たるもの、その遺志をつぎて、歌に、文に、一生をさへげて、其長技を逞うし、明治の文壇を飾るは、最もよく師恩に酬ゆるの道也。先生も地下にありて、ほゞ喜むなるべし。

露骨なる描寫

田山花袋

近日文壇に技巧と言ふことを説く者がある。技巧か、技巧か、自分は既に明治の文壇がいかに尊い犧牲をこの所謂技巧なるものに拂つたかを嘆息するもの、一人で、この所謂技巧を蹂躪するに非ざれば、日本の文學はとて完全なる發展を爲すことは出來ぬと思ふ。

技巧論者は言ふ、近時の文壇を見るに、紅露道鷗の諸大家は既に黙して、後進の徒いたづらに末流文壇に跳躑し、其の文體の支離滅裂なる、其の文章の粗雜亂暴なる、到底美術者の鑑賞に値ひするものにあらずと。成程それは左様かも知れぬ。紅葉先生時代から比べると、文體の亂暴、文章の粗策、殆ど驚かるゝばかりであるかも知れぬ。けれども自分は質問し度い、所謂その技巧の盛んであつた時代に果して奔放押ゆべからざるとき思想を發見することが出来たか、何うか。

所謂技巧時代には、文章の妙はあらう、辭句の豊富はあらう、思想の華麗はあらう、結構の妙、脚色の奇もあらう。けれど所謂技巧時代には、天衣無縫、雲の行き水の留るがごとき自然の趣を備へたる渾圓たる製作品を得ることが出来たか何うか。

虚偽の卑むべきことは誰も知つて居る。文章と思想と一致しない文字の一喙にも値せぬことは識者の皆な唱ふる所である。然るに、今の技巧論者は想に伴はざる文章を作り、心にもあらざる虚偽を紙上に聯ねて、以てこれ大文章なり、美文なりと言はうとして居るやうである。今更言はんでも解つたこと、文章は意達而已で、自分の思つたことへ書き得れば、それで満足である。拙なからうが、旨からうが、自分の思つたことを書き得たと信じ得られさへすれば、それで文章の能事は立派に終るのである。何も難かしい辭句を聯ねたり、色彩ある文字を拾ひ集めたりして、懊惱煩悶するには少しも當らぬ。

とは言へ、自分は文章に就いてあらゆる術を排するといふ

キーの『罪と罰』の如きは、技巧論者が見て以て膽を落すやうな作で、その何事をも隠さない大膽な露骨な描寫は、文章の綺麗を求め、思想の鍍せるのを望む技巧者一輩の夢にも見ることの出来ないものである。

また、イブセンにしても左様だ、その多くの戯曲の中に爪の垢ほども飾つたやうな、作つたやうな處は無い。先、例としてシヨン、カブリエレ、ボルクマンを引かう。其の頁の何處に技巧を弄し、結構をつくつた處があるであらうか。自分は只々自然の事實の痛切に吾人の精神に響いて來るより他に何等の脚色をも思想をも見出さぬのである。否、吾人の血と汗とは直ちに卷中の人物の血と汗とに觸れて、淋漓として相共に滴るがごときを覺ゆるのである。又一野鴨を見よ、其の性情の發展の順序、その遺傳的罪惡の消長、如何に其處に新しい痛切な思想のわれ等に迫るのを覺ゆることか。

又、伊太利の新勇將カブリエレ、ダヌンチオを讀んで御覽なさい。或はその文章の技巧のみを見て、流石は文章家だと喜ぶ人もあるかも知れぬが、自分の見る所は全くこれと觀察を異にして居る。ダヌンチオの書を讀んで、痛切なるあるものを感ずるのは、決して其の文章が巧妙であるからばかりではなく、其の描寫が飽までも大膽に、飽までも露骨に、飽くまでも忌む所が無いからである。即ち、かれもまた十九世紀末の革新派の潮流に浴した一人であるからである。殊に、其作「インノーセント」の如きに至つては、露骨も露骨、大膽も大膽、殆ど讀者をも戦慄するを禁じ得ざらしむる者がある。否、こればかりでは無い、苟くも十九世紀末の革新派の思

のではない。文章が思想と一致するまでの苦心、それは充分に爲んければならぬのは知つて居る。けれど今の文壇に於ける技巧論は確かにこれを言つて居るのではない、今の技巧論はあまりに今の文章の露骨に陥り、口に爲まじきことを言ひ、筆に上すまじきことを書き、所謂美術鑑賞家の小き膽を破るやうなことを爲るのを憤慨して唱へられた議論である。

美術鑑賞家、この人達の言ふ所に従へば、文章は飽までも綺麗でなければならぬ、思想は飽までも審美學の示す處に従はなければならぬ。自然を自然のままに書くことは甚しき誤謬で、いかなる事でも理想化則ち鍍せずにはならぬと言ふのである。これは随分久しい昔からの勢力で、クラシシズムは勿論、ロマンチズムも全くこれに依て行動し、十九世紀の後半季まではこの鍍文學でなければ殆ど文學で無いやうにまで思はれたのである。

けれど十九世紀革新以後の泰西の文學は果して何うであらうか。その鍍文學が滅茶々に破壊せられて了つて、何事も露骨でなければならぬ、何事も真相でなければならぬ、何事も自然でなければならぬと言ふ叫聲が大陸の文學の到る處に行き渡つて、その思潮は疾風の枯葉を捲くがごとき勢で、盛んにロマンチズムを蹂躪して了つたではないか。血にあらざれば汗、これ新しき革新派の大聲呼號する所であつたては無い。

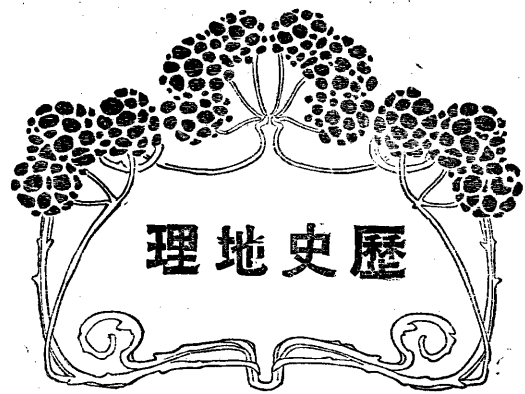
虚言と思はゞ、イブセンを見よ、トルストイを見よ、ゾラを見よ、ドストイエフスキーを見よ、其の作の中にいかに驚くべき血と汗とが籠められてあるか。殊に、ドストイエフス

湖に浴したものは、誰れとてこの影響を蒙らざるものなく、獨逸などでもウァルデンブルツフヤハウル、ハイゼなどの老成なる鍍文學と相對して、ハウフトマン、スーダーマン、ハルベ、ホルツなどの諸作家が新旗幟をかゝけて居るさまは、實に目覺しき光景である。

翻へつてわが文壇を見るに、紅、露、道、鷗の時代は少なくとも老成文學の時代であつた。其證據には審美の議論も中々盛んであつたし、理想小説、觀念小説の目も屢々繰返されたし、文章の一字一句も容易に忽諸に附せられなかつた。否、文士は多く文章の妙を以て世に知られ、結構のすぐれたるを以て人に賞美せられた。其の結果として吾人は果して何んな作品を得たかと言ふに、多くは白粉澤山の文章、でなければ卑怯小心の描寫を以て充たされた理想小説、でなければ態と事件性格を誇大に描いて人をして強めて面白味を覺えしむる鍍小説。

左様かと言つて、今の文壇が非常にすぐれたものを産出したと言ふのでは無い。否、其の作品は却つて老成時代より完全にして居らぬかも知れぬ。けれど自分は今の文壇は泰西革新派の奉する「露骨なる描寫」といふことに就いては大いに得る處があると思ふ。

それは何ういふ作者を指すと問はれるなら、自分は、天外君、風葉君、春葉君（鏡花君は明治文壇の異彩で、この思潮からは遠く獨立してと思ふ）秋聲君、柳浪君、眉山君、宙外君、其他の諸君の作品に、間接、或は直接に充分に顯はれて居ると答へる。



理地史歴

平清盛

大町 桂月

にこれ偉大なる、だ、ッ子也。日本開闢以來、われ程、だ、ッ子をこねたるものなし。尋常のだ、ッ子にては、何の事もなけれど、だ、ッ子も、偉大となれば、亦以て天下を震動するに足る。杉の木とても、垣根に植ゑらるゝが如きものにては、何等の價値もなければ、鞍馬山に生ひたるもの、如く大きくなれば、天下の壯觀たるを失はざる也。

實に、人の運は、不可思議なる哉。われ年壯なりし時、安藝守となりて、船に乗りて、熊野沖を通りしが、鱧一尾、はからずも船中にとび込み。これ大に家を興す吉兆なりとの事故、雀躍して、自から料理して、舌鼓打つて食ひ、家臣にも、お裾分けしてやりしが、その時は、まさかに、武家に例

世。上。余。を。罵。り。て。大。悪。人。なり。とい。ふ。吁。盲。目。千。人。の。世。の中。なる。哉。余。を。大。悪。人。と。見。做。す。程。の。眼。識。な。れば。愚。か。や。偽。善。者。を。善。人。と。も。て。は。や。す。也。云。へ、余。は。聖。人。君。子。に。非。ず。英。雄。豪。傑。に。も。非。ず。え。ら。き。軍。人。に。も。政。治。家。に。も。非。ず。わ。れ。は。自。か。ら。知。る。我。れ。は。竟。に。これ。偉。大。なる。だ。ッ。子。也。

のなき、太政大臣に上り、外戚となり、數百年來、政治の舞臺を獨占したりし藤原氏を投げ出して、代りて、天下の權を握らむとまでは思ひもかけざりき。

余が今のやうな身の上になりたるも、余の力量の非凡なるが故にはあらで、實に時勢の然らしむる所也。藤原氏は、良房、基經以來、代々攝關となりて、天下の權を握りしが、諸國に莊園多くなり、武門武士といふもの起れり。大化の革新、唐制にならひて、封建を廢して、郡縣を起したるが、これは、ほんの表面上の事也。表面上の事ならざるも、永久の事に非ず。諸國に住人と稱するものあり。これは、諸國宰吏の子孫なるが、たゞ住居する人との謂に非ず。住居することは勿論の事なるが、永住して、ひろく土地を有し、多く家の子、郎黨を有するもの、謂也。その有する郎黨の多少によりて、大名とも云ひ、小名ともいふ。太平ひさしくつゞきしにつれて、軍團の制すたれたり、未だ全くすたれざるも、その用をなさず。大化以來、ほど二百年間は、どうやら、かうやら、郡縣制度を維持し來りしも、寛年、延喜以後、諸國に盜賊多くなり、且つ莊園多くなり、終に公領は日本全國の百分一となり、國司は任に赴かず。諸國にて、權力ありしものは、この住人也。盜賊起るも、朝廷に兵なし。この住人に討代を命じ給ひしに、そのよく功を奏せしと、恰も猫の鼠を捕ふるが如し。朝廷にては、これ尙に重寶なるものなりとて、征伐の事は、これらの人に任かせて、枕を高くして、太平を謳歌せしが、油斷大敵、兵力のある處、終に政權のある處となりぬ。朝廷にては、藤原氏ひとり跋扈しけるを以て、皇族といへ

であるから、自分の考では、この露骨なる描寫、大膽なる描寫——則ち技巧論者が見て以て粗笨なり、支離滅裂なりとするところのものは、却つてわが文壇の進歩でもあり、また生命でもあるので、これを悪いといふ批評家は餘程時代ちくれてはあるまいかと自分は思ふ。

或は言ふかも知れん、露骨なる描寫が何故に技巧と相伴うことが出來ぬ、と。其意は、露骨なる描寫は技巧と相待つて愈々其妙を極めはせぬかといふのである。けれど自分は信ずる、露骨なる描寫を敢てすれば敢てするほど、所謂文章、所謂技巧とは愈々相離して行くものであらうと。何故かと言ふに、事愈々俗なれば文愈々俗、想愈々露骨なれば文愈々露骨なるはこれ自然の勢であるから。

自分は明治の文壇が久しい間、所謂文章、所謂技巧なるものに支配せられて、充分なる發達を爲す能はざることを甚だ遺憾に思つた一人である。文士がいづれも文章に苦心し、文體に煩悶した結果、果ては篋村調とか、紅葉調とか、露伴調とか、鷗外調とかといふ一種特別な形式に陥り、自から自己の筆を束縛して、新しき思想を有しながら、しかしその一端をも其筆に上すこと能はず、空しく文章の奴隸と爲つて居るものゝ多いのを見もし、試験も爲て、尠ならず遺憾に思つたのである。従つて、この文章の束縛を脱して多少新しい方向に進み、奔放なる思想をも描き得るやうになつたのを喜ばしくも頼もしくも思つたのである。然るに、今ゆくりなく再び技巧論の處々に起るのを聞いては、自分は黙つては居られない。

まして技巧論は單に技術の上のみの論ではなく、確かに今の意識の上にも關係して居るのであるから、これは一つ諸君の議論をも詳しく聞いて、大に研究する價値が充分にある。

次に、此頃姉崎博士などの手に、新ロマンチズムといふことが盛に唱道せられて、ワグネルの樂劇なども段々わが文壇に紹介せられつゝあるやうだが、この傾向も、自分が今まで言つた「露骨なる描寫」といふことも大なる關係があるので、日本の新ロマンチズムも今少し自然主義と交渉する所があつても宜い。

けれどあまり露骨を振り廻すと、また、技巧論者から粗笨なり、支離滅裂なりなどと言はれるから、一先是てやめます。

裸體畫に題す

太田 玉茗

遠山の霞は眉よ、
青柳の緑は髪よ、
臙指花の、それは唇よ、
夕星の、それは眼色よ、
白梅の雪は、膚よ、
紅葉の赤きは、血沙、
美しき肉團々よ、
圓滿の君が容姿に、
紅粉の、何の用あらむ、
赤裸々の貴き君よ、
我れ、問はば、む、
五臟六腑の胸の中に、
精靈の火とはに燃え、
世界を愛に暖むる、
烈しき熱りありやとよ、